学苑・英語コミュニケーション紀要　No. 906　70〜80（2016・4）

『ノーサンガー・アビー』とジェイン・オースティン

金　子　弥　生

Northanger Abbey and Jane Austen

Yayoi Kaneko

Abstract

The purpose of this paper is to highlight the realism of Jane Austen's Novels with special attention to *Northanger Abbey*. *Northanger Abbey* is a parody of a Gothic Romance, a genre which was very popular at the time *Northanger Abbey* was written. Austen tries to show that Gothic Romances are exciting, but can also encourage arrested development. Isabella Thorpe is a good example of a person who never grows up, in part because she never reads novels, for example those written by Samuel Richardson, but restricts herself to Gothic Romances. On the other hand, the heroine, Catherine Morland, develops mentally because she recognizes her ignorance and is ashamed of it. Knowing that she is ignorant, she feels she must read novels and history. Novels have the power to make people recognize and be ashamed of their ignorance. Also, Catherine changes into a person who can judge others around her through their manners because novels have helped her to become more objective. As a result, she understands the differences between the appearance and the reality of the people around her and becomes a person with good judgement and manners.

はじめに

ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）は，数多くの習作を書いた後，『分別と多感』（*Sense and Sensibility*, 1811）と『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*, 1813）を出版したことで，作家としての地位を確立した。当初，彼女はそれぞれの作品を，『エリナとマリアン』（*Elinor and Marianne*），『第一印象』（*First Impressions*）として完成させた。『第一印象』を読み感心した父親が出版交渉をするもののうまくいかず，オースティンは挫折を味わうが，後に推敲を重ね，タイトルも変更して出版に至ったのである。

その後，オースティンは 1798 年ごろに『スーザン』（*Susan*）を，当時大流行していたゴシック・ロマンスのパロディとして，またヒロインの成長物語として書き上げた。しかし生前の出版はかなわず，『ノーサンガー・アビー』（*Northanger Abbey*, 1817）と改名して彼女の死後出版された。

『ノーサンガー・アビー』は，オースティンの最初の本格的小説，という印象を読者に与えるほど若書きの部分が残っており，小説家としての彼女の主張がストレートに感じられる。これにはわけがあった。この作品は当初のタイトル『スーザン』として，1803 年，出版を目的にクロズビー

（Crosby）社に 10 ポンドで買い取られたが，出版の運びには至らなかった。そして 1816 年，先値と同額の 10 ポンドで買い戻された。すでに別の作家による同名の小説が出版されていたことから，『ノーサンガー・アビー』とタイトルを改名，主人公の名前もキャサリン・モーランド（Catherine Morland）として出版を目指すことになったのである。

オースティンは，一度書き終えた作品を数年越しで推敲を重ね，完成させる。だが，『ノーサンガー・アビー』の場合，『スーザン』として完成後，推敲するにはすでに歳月が流れすぎていた。その間にバースという場所，世の中，本の好み，人々の考え方もかなり変わった。1816 年，当時は不治の病とされたアジソン病の初期症状がオースティンにはみられたという。体力の衰えを感じつつ，オースティンは以下のことばを作品に添えている。

> This little work was finished in the year 1803, and intended for immediate publication. It was disposed of to a bookseller, it was even advertised, and why the business proceeded no farther, the author has never been able to learn. That any bookseller should think it worth while to purchase what he did not think it worth while to publish seems extraordinary. But with this, neither the author nor the public have any other concern than as some observation is necessary upon those parts of the work which thirteen years have made comparatively obsolete. The public are entreated to bear in mind that thirteen years have passed since it was finished, many more since it was begun, and that during that period, places, manners, books, and opinions have undergone considerable changes.[1]

推敲をあきらめたが故に，この作品は他のオースティン作品と比較して「若書き」という印象が強いのである。

さて，『ノーサンガー・アビー』のヒロイン，キャサリン・モーランドは牧師の父と常識的で健康的な母を持つ 10 人きょうだいの 4 番目で長女，女性としてのたしなみも持ち合わせない，ヒロインらしからぬヒロインとして登場する。モーランド家は全員不器量で，10 歳のキャサリンも美しくなかったが，性格は良かった。17 歳になると「きれいに見えるときには美人の部類に入る」（p. 16）[2] 程度に成長し，地主のアレン夫妻（Mr. and Mrs. Allen）に連れられ，初めてバース（Bath）を訪れ，社交界デビューを果たす。だが，アレン夫人は自分の衣装のこと以外に関心を払わず，「付き添い役（シャペロン）」としては全く役に立たない。そこでキャサリンは，自らの体験を通して自分の取るべき「マナーズ」[3] と言われる然るべき振舞いを身に付け，小説のヒロインとして成長していくことになる。

本論では，キャサリンの体験をそのマナーズを通して分析することで，オースティンの小説に対する姿勢を明らかにしていく。

1. 小説と『ノーサンガー・アビー』

18 世紀末から 19 世紀初頭，イギリスではゴシック・ロマンスが大流行した。「1780 年代から 1820 年までの間に，百数十篇のゴシック・ロマンスが書かれたという」が，その中には，「とめどなく空想をめぐらせて荒唐無稽におちいったり，超自然の世界に耽溺するものも多かった」という。[4] オースティンはスティーブントン（Steventon）で過ごした 1801 年までに『第一印象』，『エリナとマリアン』，『スーザン』を書き上げる。1809 年にチョートン（Chawton）に移ってからは，『分別と多感』，『高慢と偏見』，『マンスフィールドパーク』（*Mansfield Park*, 1814），『エマ』（*Emma*, 1815）を出版，

『説得』（*Persuasion*, 1818）を 1816 年に完成させている。オースティンの作家活動が，ちょうどゴシック・ロマンスの隆盛期と重なっていることがわかる。

クロズビー社が原稿を買い取りながらもついにその出版に至らなかった理由はなにか。大島氏によれば，『高慢と偏見』の原型『第一印象』を読んだ父親がそのすばらしさに感心し，自らある出版社に出版の打診をするが失敗に終わった。当時の出版界の情勢はゴシック・ロマンスに傾いており，リアリズム作品を出版しようとする社は少なかったのではないか。そう考えたオースティンは，「敵の足許を抄いつつ同時に自らの創作の旗幟をも鮮明にしておこう」という創作動機をもって『スーザン』を執筆したのではないか。以上が大島氏の推測である。[5]『スーザン』をゴシック・ロマンスのパロディに仕上げることで，その現実離れした世界を信じ夢中になることの愚かさを示すと同時に，小説とはいかなるメッセージを読者に伝えるべきものかを示そうとしたオースティンの意欲の表れと言っても過言ではないだろう。

オースティンはバースで出会った 4 歳年上のイザベラ・ソープ（Isabella Thorpe）の勧めで，キャサリン・モーランドに初めてゴシック・ロマンスを読ませている。その結果，彼女はその世界にすっかり魅了されてしまう。一方，キャサリンに大きな影響を与えるイザベラは大変な美人で，バースについても詳しく知っている。アレン夫人が頼りない分，初めての土地で心細いキャサリンにとっては頼りになる人物として登場する。兄ジェイムズ・モーランド（James Morland）の学友，ジョン・ソープ（John Thorpe）の妹であることで，信頼感も増す。ふたりはすぐに意気投合し，大の仲よしになる。マリリン・バトラー（Marilyn Butler）は本書のペンギン版序文の中で，これはすべてイザベラの計算尽くの行動であり，まるでシェイクスピア劇に登場するイアーゴかヤーキモーの女性版のようにキャサリンおよびジェイムズの幸せを滅茶苦茶にしようとしていると指摘する。クリスマス休暇でソープ家に滞在したジェイムズに目をつけたイザベラは，巧みにキャサリンのバース訪問時期を聞きだし，偶然を装い彼女とバースで出会うように取り計らう。お互いの兄同士が親友であることを利用してキャサリンを油断させ，ジェイムズに接近，最終的には彼から婚約を取り付けるのが目的である，というのである。[6]

イザベラがこうした行動をとるには理由がある。イザベラの母ソープ夫人は未亡人で，金持ちではない。その上，イザベラを含む娘三人とジョンを含む息子三人，合計六人の子どもがいる。明るく善人だが，子どもに甘い。また，当時は一般的に母親は娘の結婚相手探しに奔走するものだが，そうすることもなく，物語にはほとんど登場しない。その分，イザベラが自分の将来を考え，よりよい結婚相手を獲得するためその美貌を最大限に利用し，自らの計画を実行する必要があった。首尾よくキャサリンと親友になり，ふたりは毎日のように共に過ごす。共通の趣味は当時大流行中のラドクリフ夫人（Ann Radcliffe, 1764–1823）による『ユードルフォの謎』（*The Mysteries of Udolpho*, 1794）や『イタリア人』（*The Italian*, 1797）を読むこと。これらゴシック・ロマンスとは，「中世のゴシック建築の城や寺院を舞台に，薄暗い回廊や不気味な地下納骨堂，秘密の抜穴や落し戸や隠し扉，錆びた蝶番の立てる気味の悪い音やすぐに消えてしまうランプの火，（…中略…）そして迫害される可憐な少女と云うような道具立てで，怪奇趣味に満ちた感傷的で扇情的な物語が展開する恐怖小説の類」[7] で，想像力によりありえない出来事が次々に展開するのが特徴である。小説の中盤で登場するノーサンガー・アビー（Northanger Abbey）の当主を父に持つティルニー兄妹（Mr. and Miss Tilney）もゴシック・ロマンスを読んでいる。

小説について語り合うイザベラとキャサリンの会話を見てみよう。

> "It is so odd to me, that you should never have read Udolpho before; but I suppose Mrs. Morland objects to novels."
>
> "No, she does not. She very often reads Sir Charles Grandison herself; but new books do not fall in our way."
>
> "Sir Charles Grandison! That is an amazing horrid book, is it not?—I remember Miss Andrews could not get through the first volume."
>
> "It is not like Udolpho at all; but yet I think it is very entertaining." (p. 40)

キャサリンがゴシック・ロマンスに親しむようになったのは，前述のとおりイザベラの影響だった。一方，リチャードソン（Samuel Richardson, 1689-1761）を祖にもつイギリス小説は，「人間関係を中心とした市井の人の営みを主題とし，細部性・具象性・実証性を具えた噂話的性格が色濃い」[8] と言われるが，そのリチャードソンの作品，『サー・チャールズ・グランディソン』（*Sir Charles Grandison*, 1753-54）はオースティンのお気に入りの小説の一冊であった。作中では，キャサリンも母の好むこの小説をおもしろいと考えている。対照的に，イザベラはこの作品を全く受け入れる気はない。小説に対する趣味の相違を用いてふたりの感覚の根本的な相違が示される点である。

オースティンは語り手として作中で，次のように述べている。

> .....or, in short, only some work in which the greatest powers of the mind are displayed, in which the most thorough knowledge of human nature, the happiest delineation of its varieties, the liveliest effusions of wit and humour are conveyed to the world in the best chosen language. (pp. 36-37)

小説には，知性，人間性への完璧な知識，人間性に関する適切な描写，はつらつとした機知とユーモアが選び抜かれたことばで表現されている，と言うのである。その小説に全く興味を示さず，ゴシック・ロマンスしか読もうとしないイザベラには，人間性になにか問題があると読者が推測するのは妥当であろう。

バースで出会ったもう一組のきょうだい，ティルニー兄妹は，ソープ兄妹とは対照的な存在である。ふたりは「すばらしいお屋敷に住んでいるのに，すこしも得意そうな顔をしないし」，「容姿の立派さ」に関しても同様だった。ヘンリー・ティルニー（Henry Tilney）は，ティルニー将軍（General Tilney）の二男で，明るく知的な牧師である。キャサリンは，社交会館のロウアー・ルームズで儀典長に彼を紹介されるという，なんとも現実的な出会いを果たしたそのときから，彼に心を奪われる。

ティルニー兄妹との交際を始めたキャサリンは，ゴシック・ロマンスについて話をするが，彼女は間もなくミス・ティルニー（Eleanor Tilney）が歴史書をよく読むことを知る。キャサリンは歴史書をどうしても好きになれないと言い，その理由を次のように語る。

> ".....: and yet I often think it odd that it should be so dull, for a great deal of it must be invention. The speeches that are put into the heroes' mouths, their thoughts and designs—the chief of all this must be invention, and invention is what delights me in other books." (p. 104)

ゴシック・ロマンスのようなフィクションに夢中のキャサリンは，大部分が作り話であるはずの歴史

書を楽しめないのは自分のことながら不思議だと思う。これに対してエリナーは次のように答える。

> "Historians, you think, ...display imagination without raising interest. I am fond of history—and am very well contented to take the false with the true. In the principal facts they have sources of intelligence in former histories and records, which may be as much depended on, I conclude, as any thing that does not actually pass under one's own observation; (pp. 104-5)

その後，兄妹は風景について話し合う。キャサリンは，社交界で必要な，所謂アコンプリッシュメントといわれる女性としてのたしなみも教養も十分ではない。絵画についての知識も皆無で，当然，ふたりの会話を全く理解できない。

> Here Catharine was quite lost. She knew nothing of drawing—nothing of taste: —and she listened to them with an attention which brought her little profit, for they talked in phrases which conveyed scarcely any idea to her. The little which she could understand however appeared to contradict the very few notions she had entertained on the matter before. It seemed as if a good view were no longer to be taken from the top of an high hill, and that a clear blue sky was no longer a proof of a fine day. She was heartily ashamed of her ignorance. (p. 106)

キャサリンとイザベラの相違は，自分の無知を恥じることができるか否かである。自分の趣味に満足し，気に入らないものは受け入れないイザベラに対し，自分の「無知」を恥じる心のあるキャサリンは自分を一個の対象として客観視することで，自己の至らぬ点を直し，成長する可能性がある。

ギリシャの哲学者ソクラテス（Socrates, 469?-399 B.C.）は「無知の知」を唱えたが，これはオースティンが愛読したシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の作品にも通じる思想[9]である。キャサリンはティルニー兄妹との会話を通して，自分の無知を認識することで，延いては自己を向上させることができるのである。

2. お金とソープ兄妹

ソープ兄妹は，ふたりとも金銭への関心が高い。

ジョン・ソープはでっぷり太った中背で，自分が美男子だと思い込んでいる。会話の話題は馬車など自分の持ち物の自慢話か金銭に関することのみである。"Old Allen is as rich as a Jew—is not he?"（p. 62）とキャサリンに尋ねるのは，子どものいないアレン氏の財産相続人はだれかが気になっているからだ。ティルニー兄妹の知的刺激に溢れる会話とは似ても似つかぬ内容に，キャサリンはうんざりすることになる。

イザベラ・ソープの目的は有利な結婚をすることである。彼女は兄の親友で，財産もありそうなジェイムズ・モーランドとの婚約に何とかこぎつけようと全力を傾ける。自分の財産は非常に少ない，彼の両親が賛成するか心配だが，財産よりも愛情を大切だと考えていると躍起になって主張する。だが，続けて以下のように語るのである。

> ".....my wishes are so moderate, that the smallest income in nature would be enough for me. Where people are really attached, poverty itself is wealth: grandeur I detest: I would not settle in London for the universe. A cottage in some retired village would be extasy. There are some charming little villas about Richmond." (p. 114)

愛があれば貧しさもいとわないと主張すると見せかけて，イザベラはロンドン郊外の高級別荘地リッチモンドでの生活を実は望んでいる。キャサリンは，“And to marry for money I think the wickedest thing in existence.”（p. 118）と考えており，イザベラの本音と建前に気づかないどころか，イザベラのことばをそのまま信じ，いい人だと思い込む。

世間知らずのキャサリンとは異なり，ジェイムズは大学に行き，社会経験もあるはずだが，キャサリンが時に矛盾を感じるイザベラの行動に疑念を抱くことはない。イザベラは彼との婚約を勝ち取るために自分の本音を全く見せないのである。その結果，ジェイムズは彼女に夢中になり，婚約する。

人には理屈で説明できない面があり，理屈抜きの行動は愚かであると言えるかもしれない。だが，それは同時に極めて人間的でもある。恋する人間は，理屈抜きで恋をする。つまり，愚かにならなければ何かに夢中になれないということだ。これは人文主義者エラスムス（Desiderius Erasmus, 1466–1536）が『痴愚神礼賛』（*Encomium Moriae*, 1511）で示した思想であり，オースティンが愛読したシェイクスピア作品にも通じる思想である。ジェイムズは今やイザベラに夢中で何も見えない状態なのである。

イザベラがジェイムズの財産が思ったほどないことを知った時期と前後して，彼女の前にティルニー大尉（Captain Tilney）が現れる。美男子のティルニー大尉はヘンリーとエリナーの兄で，ティルニー家の財産相続人である。まさにイザベラの求める理想の男性像と言えよう。イザベラの心が急速にティルニー大尉に傾いたことは，「ティルニー大尉」の名前が何度もイザベラの口にのぼることで示される。[10] 実際，ティルニー大尉とイザベラとの恋の戯れのような会話（p. 139）を聞いて，キャサリンは当惑する。キャサリンとその家族は常に自らのことばに誠実なのである。

> Her own family were plain matter-of-fact people, who seldom aimed at wit of any kind; her father, at the utmost, being contented with a pun, and her mother with a proverb; they were not in the habit therefore of telling lies to increase their importance, or of asserting at one moment what they would contradict the next. (p. 64)

今のイザベラの最大の関心事は，ジェイムズではなく，ティルニー大尉が相続することになるノーサンガー・アビーなのだ。

> And so you are going to Northanger!—I am amazingly glad of it. It is one of the finest old places in England, I understand, I shall depend upon a most particular description of it. (p. 135)

彼との結婚がうまくいけば，ノーサンガー・アビーは自分のものになる。イザベラの心はその期待感で一杯なのである。

3. マナーズと目覚め

ジョン・ソープは自分の都合に合わせて嘘をつく。一般に，人は本音と建前を使い分けるのだが，すべてが本音のキャサリンがその違いに気づくには経験が必要である。そして，彼女が他人を判断する基準となるのがマナーズである。心の中でどう考えていようと，その人のとる行動，マナーズにより人は判断される。

ジョン・ソープのマナーズを考察してみよう。

ジョンは知り合って間もなくキャサリンにダンスを申し込む。だが，彼はダンスを申し込んでおきながら，キャサリンを置き去りにしてどこかへ行ってしまう。その間キャサリンは，ダンス相手のいない女性と周囲の人びとに思われてしまった上に，せっかく申し込まれたヘンリーからのダンスを断らざるをえず，悔しい思いをする。ジョンのこの行動は，キャサリンがジョンを判断する際の基準の一つとなる。

また，ジョンはキャサリンとティルニー兄妹との散歩の約束を，自分の都合を優先させるために嘘をつき，彼女に破らせてしまう。それを知ったキャサリンは，事情を説明して再度，約束をする。だがジョンは，再び自分たちの都合を優先させるため，ティルニー兄妹に散歩の約束は別の日になったと勝手に伝えてしまう。これを知ったキャサリンは，兄とイザベラの制止を振り切って再びティルニー兄妹の元へ走り，約束を実行するのだった。キャサリンがティルニー兄妹との約束を果たしている間，ジョンはイザベラ，ジェイムズと遠出し，イザベラはジェイムズの心を摑んで婚約にこぎつける。つまり，ジョンにとってこの遠出は，イザベラとジェイムズとの婚約を成立させ，自分はキャサリンとの婚約にこぎつける[11]ためにぜひとも必要だったのである。

キャサリンは，こうした再三にわたるジョンの失礼なマナーズに我慢できない。ジョンたちからの遠出の誘いを断り，愛する兄を怒らせたのは残念だが，彼女の考えははっきりしていた。

> She［Catherine］had not been withstanding them［John, Izabella and James］on selfish principles alone, she had not consulted merely her own gratification; *that* might have been ensured in some degree by the excursion itself, by seeing Blaize Castle; no, she had attended to what was due to others, and to her own character in their opinion. (p. 97)

「人に何をすべきか」,「自分が人にどう思われるかを考え」ること，これはまさにマナーズの問題である。キャサリンは経験がなく，世間知らずかもしれないが，健全な両親の元，しっかりしたマナーズを身に付けていることがわかる。ティルニー兄妹にひどい人と思われたくないという強い思いが，彼女に必死の行動をさせた。こうしてキャサリンは，自己判断に基づき行動したが，兄をはじめとする三人の怒りは収まらない。不安になってアレン氏の意見を聞きにいき，キャサリンは自分の判断に自信を持つまでに成長したのである。

最も問題となるのは，イザベラのマナーズである。婚約者であるジェイムズの面前においても，大尉に特別な好意を示されるとすぐに反応する。やがて彼女は，ティルニー大尉と結婚することで玉の輿に乗ろうと，突然ジェイムズとの結婚計画を破談にしようとするのである。これは，ブランドン大佐（Colonel Brandon）の前でウィロビー（John Willoughby）に好意を示されると強く反応するマリアン（Marianne Dashwood）や，夫の面前でヘンリー・クロフォード（Henry Crawford）に誘惑されるとすぐに反応するマライア（Maria Bertram）を思わせる行動である。[12]「人にどう思われるか」を基本に行動するキャサリンには，婚約中にもかかわらず，大尉とダンスをするイザベラの気持ちが理解できない。

人は本音と建前を使い分けると前述したが，イザベラとジェイムズが婚約したときのふたりを考察してみよう。ジェイムズは，自分を愛していると言ったイザベラを心から愛している。イザベラを愛し結婚を望む点で，彼のことば（建前）と態度（本音）は一致している。一方，ティルニー大尉出現以前のイザベラは，ジェイムズを愛している，ということばと一致した態度を取っていた。つまり，

金銭的な視点から彼女はことばと態度が一致するように振舞っていたのである。だが今や，彼女は，社会経験の浅いキャサリンがおかしいとはっきりわかるような態度，つまり，本音と建前が異なる態度を公衆の面前で取るようになった。キャサリンは兄のことが心配でたまらないが，ヘンリーは次のように彼女を説得する。

> You have no doubt of the mutual attachment of your brother and your friend; depend upon it therefore, that real jealousy never can exist between them; depend upon it that no disagreement between them can be of any duration. Their hearts are open to each other, as neither heart can be to you; they know exactly what is required and what can be borne; and you may be certain, that one will never tease the other beyond what is known to be pleasant. (p. 144)

キャサリンは，ヘンリーのことばに納得できない。イザベラの行為を思い出しても彼女のマナーズからは，ジェイムズを本気で愛しているのか確信できず，兄を心配せざるを得ないのである。心を痛めるキャサリンに対してオースティンは，ヘンリーに次のように言わせている。

> No man is offended by another man's admiration of the woman he loves; it is the woman only who can make it a torment. (p. 143)

イザベラの計略をすべて見透かしているヘンリー[13]の意見には，オースティンのマナーズに対する厳しい指摘が間接的に示されている。イザベラが正しいマナーズの持ち主であれば，他人が彼女にどう接してこようと問題にはならない。マナーズはその人の価値を判断する基準なのである。

4. ゴシック・ロマンスからの脱却

バース滞在中にキャサリンはティルニー将軍からの招待を受け，ノーサンガー・アビーを訪れる。ジョン・ソープから得た，キャサリンが地主アレン氏の財産相続人であるといういい加減な情報を信じ，二男ヘンリーの嫁にと将軍は考えた。そのため，キャサリンにはことのほか優しい態度をとり，自分の屋敷の最新式の設備を見せて満足する。こうした姿勢は，当時の地主階級に典型的な姿であった。[14] 結婚の条件として重要なのはお金である。この点はティルニー将軍とイザベラやジョン・ソープとの共通点であると言えよう。

ゴシック・ロマンスを愛読するキャサリンは，しばしばゴシック・ロマンスの舞台となる修道院がティルニー家の現在の屋敷であることに興味津々である。それを助長するようにヘンリーがゴシック・ロマンスの話を道々紹介する。しかし，彼女の期待とは裏腹に，元修道院の古い屋敷は現代風にリフォームされていた。ティルニー夫人はすでに死亡していると知ると，キャサリンは，なにかわけがあると勝手に想像力を膨らませる。将軍の早朝の散歩，亡き妻の好きだった小路を歩こうとしないこと，妻の肖像画を自分の部屋に飾らないことなど，将軍の行動のすべてが怪しく思えてくる。そして，将軍は妻にひどい仕打ちをしたに違いない，という結論に至り，とうとう将軍に激しい嫌悪感を抱くまでになるのだった。

キャサリンの想像力はとどまるところを知らず，ついには将軍は妻を殺害したと思い込むに至る。想像力というよりは，妄想と言えよう。自分で自分の恐怖心を募らせ，将軍の正体を暴くことを半ば期待しながら，ひとりで屋敷を探索する。この行為は，晩年の作品『エマ』において単なる勘違いに

より妄想を構築し，ハリエット（Harriet）を振り回し，ジェイン・フェアファックス（Jane Fairfax）を傷つけ，さらに自らを窮地に追い込むエマ（Emma Woodhouse）を彷彿とさせる。

夫人の部屋はキャサリンの期待を裏切り，明るく感じの良い部屋だった。それでもキャサリンは，将軍が証拠を残すはずはないと思い込むのだった。だが，部屋を探り歩いていた彼女は，その時，一日早く帰宅したヘンリーに見つかってしまう。ヘンリーからティルニー夫人の病と亡くなったときの様子を聞いて，キャサリンは自分の愚かさにやっと気がつくのである。ここでオースティンはゴシック・ロマンスについて，以下のように批判している。

> She [Catherine] remembered with what feelings she had prepared for a knowledge of Northanger. She saw that the infatuation had been created, the mischief settled long before her quitting Bath, and it seemed as if the whole might be traced to the influence of that sort of reading which she had there indulged.
>
> Charming as were all Mrs. Radcliffe's works, and charming even as were the works of all her imitators, it was not in them perhaps that human nature, at least in the midland counties of England, was to be looked for. (p. 188)

ゴシック・ロマンスは根拠のない恐怖心をあおり，スリルを味わうことに主眼が置かれている。人間性についての考察はほとんどなく，単なるエンターテインメントでしかない。キャサリンとイザベラの対比でも明らかなように，読むことで読者を成長させることは難しい。換言すれば，ゴシック・ロマンス以外に読書しないイザベラのような人物には，人間的成長はあり得ない，ということだ。彼女の人生の目的は，より経済的に豊かな男性との結婚であり，その目的を果たすためにはマナーズを無視しても構わない。例えば，財産や社会的地位などその人の表層しか問題にしない。その結果，ティルニー大尉の恋の戯れのような態度を本気にし，彼との婚約を確信してジェイムズとの関係を終らせるのだった。ジェイムズには本音と建前を使い分けたイザベラも，ティルニー大尉の本音と建前には気づかない。大尉の方がイザベラより一枚上手であったということであろう。

おわりに

財産を価値基準とするもうひとりの人物，ティルニー将軍は，キャサリンが地主アレン氏の財産相続人であるというジョン・ソープの話を信じて彼女を屋敷に招待し，もてなした。そして，再びジョン・ソープの，キャサリンは実は貧乏人の娘だったという作り話を信じ，突然，彼女をひとりで実家に帰してしまう。わけも分からず当惑するキャサリンは，帰宅後は元気をなくし，別人のようになってしまう。しかし，そこにヘンリーが突然訪問し，彼女にプロポーズする。プロポーズの理由は，彼女への感謝の気持ちがきっかけだと“I”で登場する語り手は言う。

> .....though Henry was now sincerely attached to her, though he felt and delighted in all the excellencies of her character and truly loved her society, I must confess that his affection originated in nothing better than gratitude, or, in other words, that a persuasion of her partiality for him had been the only cause of giving her a serious thought. It is a new circumstance in romance, I acknowledge, and dreadfully derogatory of an heroine's dignity; but if it be as new in common life, the credit of a wild imagination will at least be all my own. (p. 227)

オースティンは，リアリズムによりヘンリーとキャサリンを結びつけた。キャサリンの彼の話に熱心に耳を傾ける様子，何事にも正直に当たる純粋さ，裏表のない性格，妹エリナーとの関係，そしてヘンリーへの一途な思いがヘンリーのキャサリンへの気持ちを愛情に変えたのである。キャサリンの自分では気づかぬ積極性が，ヘンリーの気持をとらえる結果になった。これは「恋愛物語としては新しいパターンかもしれないし，ヒロインの名誉を著しく傷つけることになるかもしれない」が，現実にあり得ることであり，リアリズムに基づいた展開である，とオースティンは主張する。そうでなければ，オースティン自身の“a wild imagination”（「奔放な想像力」）の賜物であるとうそぶいている。ここでヒロインのキャサリンが，全く世間知らずであるとの設定が生きてくる。ジュリエット（Juliet）がロミオ（Romeo）が聞いていると知らずに彼への思いを告白してしまう状況と酷似した展開と言えよう。シェイクスピアは，男性中心社会において世間の慣習に染まらぬほど若いヒロイン，ジュリエットを自分の感情をストレートに表現する新しい女性像として創造した。オースティンはこれに触発されてか，キャサリンを世間知らずの十七歳に設定することで，女性は男性からのプロポーズを数度断ってから受け入れるという当時の慣習を彼女に破らせ，自らの気持ちをストレートに表現させるというリアリズムに即して物語を展開させる。つまり，マナーズを通して人物を描写し，真の姿を浮かび上らせているのである。マナーズを通じてリアリズムの視点から，「人間性に関する完璧な知識と，さまざまな人間性に関する適切な描写と，はつらつとした機知とユーモアが，選び抜かれた言葉によって世に伝えられ」ることが，オースティンの小説に対する姿勢なのである。

『ノーサンガー・アビー』の最後は，ティルニー将軍への現実的な言及で締めくくられる。身分や社会的地位を重んじる将軍は，もちろん，ヘンリーとキャサリンの結婚を認めない。だが，結婚して貴族となった娘エリナーからふたりの結婚を認めてほしいと頼まれると，喜んで承諾する。ティルニー将軍は家長として家庭での絶対的地位を誇り，ティルニー兄妹は父には絶対服従であった。しかし，今やティルニー将軍は，貴族という地位に敬意を表し，娘の願いはすべて喜んで聞き入れる。男性中心社会でジェントリー[15]として，父親として絶対の権威をふるってきたにもかかわらず，上流階級に属することになったエリナーに対しては，たとえ娘といえども服従する父親をリアリスティックに描くことで，オースティンはジェントリー階級のティルニー将軍の立場の危うさを浮き彫りにすることを忘れなかった。

注

1 Jane Austen, *Northanger Abbey*, Penguin Books, 1995, p. 13. 以後，本文からの引用はすべてこの版による。

2 訳は中野康司訳『ノーサンガー・アビー』（東京: ちくま文庫，2009 年）。以後，本文の訳はすべてこの版による。

3 川本氏はマナーズについて次のように説明する。「小説において人物を創り上げているもの一切を，マナーズとよんで差支えなかろう。」，川本静子，『ジェイン・オースティンと娘たち: イギリス風俗小説論』（東京: 研究社，1984 年），p. 18.

4 橋口稔編著，『コンパクトイギリス文学史』（東京: 荒竹出版，1983 年），p. 234.

5 大島一彦，『ジェイン・オースティン:「世界一平凡な大作家」の肖像』（東京: 中公新書，1997 年），p. 119. その他の理由として考えられることは，同書 p. 120. を参照のこと。

6 Marilyn Butler, “Introduction” in *Northanger Abbey*, Penguin Books, 1995, pp. xxxvi-xxxvii.

7　大島一彦，pp. 118-9.

8　川本静子，p. 5.

9　『お気に召すまま』でタッチストンは以下のように語る。“The fool doth think he is wise, but the wise man knows himself to be a fool.” *As You Like It*, V, i.

10　参照: “Tilney says it is always the case with minds of a certain stamp.”（p. 136），“Tilney says, there is nothing……I believe he is very right.”（p. 138）

11　ジョンは，キャサリンがアレン氏の財産相続人だと勝手に思い込み，それが理由でキャサリンとの結婚をもくろんでいた。

12　オースティンの作品では，*Sense and Sensibility* の Marianne にしろ *Mansfield Park* の Maria にしろ，マナーズに問題のある女性には厳しい結末が用意されている。

13　Marilyn Butler, p. xxxvi.

14　*ibid.*, p. xxviii.

15　ジェントリー階級とは「大貴族や大地主の下に位置する」階級で「借地人を抱えられるほどの土地財産を所有」する階級を指す。ダニエル・プール，『19 世紀のロンドンはどんな匂いがしたのだろう』（東京: 青土社，1997 年），p. 62.

参考文献

Austen, Jane. *Northanger Abbey*, Penguin Books, 1995.

———. *Sense and Sensibility*, Penguin Books, 1995.

———. *Mansfield Park*, Penguin Books, 1996.

———. *Emma*, Penguin Books, 2003.

Butler, Marilyn. “Introduction” in *Northanger Abbey*, Penguin Books, 1995.

Shakespeare, William. *Complete Works of William Shakespeare*, Harper Collins Publishers, 1994.

エラスムス著，沓掛良彦訳，『痴愚神礼讃: ラテン語原典訳』，東京: 中央文庫，2014 年。

大島一彦，『ジェイン・オースティン:「世界一平凡な大作家」の肖像』，東京: 中公新書，1997 年。

川本静子，『ジェイン・オースティンと娘たち: イギリス風俗小説論』，東京: 研究社，1984 年。

ジェイン・オースティン著，中野康司訳『ノーサンガー・アビー』，東京: ちくま文庫，2009 年。

ダニエル・プール著，片岡信訳，『19 世紀のロンドンはどんな匂いがしたのだろう』，東京: 青土社，1997 年。

橋本稔編著，『コンパクトイギリス文学史』，東京: 荒竹出版，1983 年。

＊本稿では原典の引用はルビを適宜省略した。

（かねこ　やよい　　英語コミュニケーション学科）